広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　249－258

条件文の帰結部分における形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替

小　竹　直　子

（2010年10月７日受理）

Alternation of the Finite Form of Adjectives and Adjective + naru in the Consequence Clause of Conditional Constructions

Naoko Kotake

Abstract: This paper examines the reason why the finite form of adjectives can sometimes alternate with the adjective+naru when it appears in the consequence clause of the conditionals as shown in “Homerareruto, ureshii/ureshiku-naru (I would be pleased if I am praised).” It is argued that the alternation becomes possible only when the adjective expresses either “the instantaneous feeling of experiencers” or “the property of events themselves”. When the adjective is interpreted as “the instantaneous feeling”, the meaning becomes synonymous to the change of psychological state that is usually expressed by the adjective + naru. When the adjective+naru is interpreted as “the property of event”, the meaning of adjective + naru also approaches to the static property that is usually expressed by the adjective. The alternation phenomena indicate the continuity between the dynamic event and the static property mediated by psychological expressions.

Key words: conditional constructions, alternation, the finite form of adjectives, adjective + naru, psychological expressions
キーワード：条件文，交替，形容詞終止形，形容詞＋ナル，感情・感覚

１．はじめに

形容詞は，時間の流れによって変化したり展開したりすることのない「状態」を表す品詞である（影山，2009:9）。たとえば，(1) が表す状態は，それが継続する限り変動することはないし，それがいつ終わるかという明確な終点も想定されていない。

(1) 顔が赤い。

時間の流れの中で新たな状態が生起したり，状態が一時的に成立して，また消失したりすることを表す場合には，動詞を付加して表現する必要がある。(2a) では状態の生起，(2b) では状態の一時的成立を表す際，形容詞「赤い」に変化動詞「ナル」が複合した形式が用いられている。

(2) a.　お酒を飲み始めて30分で，顔が赤くなった。
　　b.　彼女と話をしている間だけ，顔が赤くなっていた。

このように状態の生起，消失という事態の動的展開を表す場合は，形容詞に変化動詞が複合した形式で表し，動的展開のない状態は形容詞単独で表すという使い分けがなされていると言える。以下，前者を「形容詞＋ナル」，後者を「形容詞終止形」と呼んで区別する。

ところが上記の使い分けの原則に反して，形容詞終止形の非過去形[1] が形容詞＋ナルの非過去形とともに状態の生起を表すように見える場合がある。それは，

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：酒井　弘（主任指導教員），大浜るい子，迫田久美子，白川博之，町　博光

次のような条件文の帰結部分において観察される。

(3) a.　家の中を綺麗にすると｛気持ちがいいです／気持ちがよくなります｝よね。

b.　立ちっぱなしの作業が続くと，｛辛い／辛くなる｝。

c.　自由な意見交換ができなくなったら，｛寂しい／寂しくなる｝ね。

d.　息子から頼られると，｛嬉しい／嬉しくなる｝。

（WEB 実例[2]，原文終止形）

たとえば，(3a) の条件文では「家の中を綺麗にする」という事態の実現を契機として，「気持ちがいい」という状態が生起することを表していると考えられる。そのような状態の生起を表す条件文の帰結部分に，変化を表さないはずの形容詞終止形が用いられるのはなぜだろうか。

一つの可能性は，(3) のような条件文の帰結部分に用いられる形容詞は例外的な語彙特性を持ち，終止形で変化を表すことができるのではないか，そのため形容詞＋ナルと置き換えられるのではないかというものである。確かに，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れるか否かには，形容詞の意味が影響していると思われる。(4) のような場合，形容詞終止形の使用は不自然で，交替が成立しないが，主節の形容詞を (4') のように話し手の感覚を表すものに変えると，形容詞終止形の使用が自然に感じられる。

(4) a.　お酒を飲むと，顔が｛??赤い／赤くなる｝。

b.　温泉に入ると，肌が｛??綺麗だ／綺麗になる｝。

c.　テレビゲームをしたら，目が｛??悪い／悪くなる｝。

(4') a.　お酒を飲むと，体が熱い。

b.　温泉に入ると，肌がつるつるだ。

c.　テレビゲームをしたら，目が痛い。

このことから条件文の帰結部分に人の感情や感覚を表す形容詞が用いられる場合，変化の意味に近付くのではないかと考えられる。

またもう一つの可能性は，(3) の形容詞終止形は変化を表しているのではなく状態を表しているのだが，形容詞＋ナルのほうが状態に近付いているのではないかというものである。形容詞＋ナルによる (5) のような表現は，その可能性をうかがわせる。すなわち (5) の意味は (6) に近く，主題である「花束のプレゼント」の恒常的属性を述べているように思われる。

(5) 花束のプレゼントは，嬉しくなる。

(6) 花束のプレゼントは，嬉しいものだ。

本来変化というものは，特定の時空間に実現する出来事だが，それが反復的・恒常的に起こる場合，属性の意味に近付くことがある[3]。(5) の形容詞＋ナルが属性として解釈されるのは，そのためだと考えられる。これと同様の解釈が (7) のような条件文でも，成り立つのではないだろうか。つまり，(7) では形容詞＋ナルが属性的に解釈されるために，形容詞終止形と意味的に近付いているのではないかと考えられる。

(7) 花束をもらうと，｛嬉しい／嬉しくなる｝。

本稿は，以上の二つの可能性を検討することで，(3) のような交替現象に関わる意味要因を考察する。

本稿の構成は，次のとおりである。第２節で，関連する先行研究を批判的に検討し，それを踏まえて第３節で，(3) のような交替現象がどのような条件文で，どのような意味・性質を持った形容詞を述語とする場合に成立するかを整理・記述する。その上で，なぜ状態と変化という本来異なる事態の局面を表す形式が交替可能になるのかについて，その要因を考察する。第４節で論をまとめ，最後に本稿の理論的意義を述べる。

２．先行研究の指摘とその検討

ここでは条件文の帰結部分に形容詞の終止形が現れる現象に言及する先行研究を挙げ，その指摘を批判的に検討する。豊田（1983）は，接続助詞「と」による条件文[4]について詳細に記述するものであるが，「と」条件文の帰結部分に現れ得る形容詞が「現在の気持ち」を表すものに限られると指摘している点で，本稿の考察に示唆を与える。しかし，豊田（1983）では「現在の気持ち」の範囲を明確にしていないため，(3) のような現象の成立を予測する上で問題が残る。

また定延（2002，2008）は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる現象を，状態がデキゴト化していると捉えている点で，本稿の関心に近い。しかし，状態がデキゴト化すると言うよりも，むしろデキゴトが状態に近付いていると捉えられる場合もあることについて，定延（2002，2008）では検討されていない。本稿は，条件文の帰結部分に現れる形容詞がデキゴト化しない解釈があり得ることを示し，デキゴトが状態に近付く可能性を検討する。

以下，この二つの先行研究の指摘とその問題点を具体的に見ていく。

2.1．豊田（1983）の指摘とその問題点

豊田（1983）は，接続助詞「と」による条件文で，後件に形容詞が非過去形で用いられる場合について次のように指摘している。すなわち豊田（1983）によると，前件に動作性の述語が用いられ[5]，後件に状態性の述語が非過去形で用いられる場合に，後件は「現在の気持ちを表す」表現に限られるという。たとえば，(8) の「楽しい」「おいしい」は自然な表現として受け入

れられるが，(9) の「速い」「重い」では容認度が落ちるとされている。

(8) a.　パーティーは花子さんが来ると，楽しい。
　　b.　メロンは冷たくすると，おいしい。
(9) a. ?この自転車はギヤを切り換えると，速い。
　　b. ?この手紙は写真を入れると，重い。
（豊田 1983:12-13）

さらに豊田（1983）は，(9) のような場合に終助詞の「ね」や「な」を付加すると，容認されやすくなることを指摘している。

(9') a.　この自転車はギヤを切り換えると，速い｛ね／な｝。
　　b.　この手紙は写真を入れると，重い｛ね／な｝。
（豊田 1983:13）

終助詞「ね／な」の付加によって，後件の「速い，重い」などの事態を現在感じたこととして表すことになるために容認可能になると，豊田（1983）は説明している。

また，「気持ち」を述べる形容詞であっても，「～たい」「欲しい」は意志的なモダリティを表すため，「と」条件文の文末に生起できないとされている[6]。確かに (10) のような場合，形容詞＋ナルの使用は全く自然だが，終止形はやや不自然になる。またこの場合，「ね／な」を付加しても容認されにくいと述べている。

(10) a.　原作の小説を読むと，映画が｛?見たい／見たくなる｝ね。
　　b.　疲れると，甘い物が｛?欲しい／欲しくなる｝な。

以上の豊田（1983）の指摘は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる現象と，形容詞の意味の関連性を示す点で示唆的であると言える。

しかし，「現在の気持ち」という意味制約が具体的にどのような範囲の述語に当てはまるのかについて，豊田（1983）では明確に論じられていない。

そのため，どこまでを「現在の気持ち」に含めてよいかという問題が残る。(9') のような例を見ると，終助詞「ね／な」を付加すれば，形容詞の語彙制約がなくなるかのように見えるが，決してそうではない。(11) のような場合には，「ね／な」を付加してもかなり不自然に感じられる。

(11) a. ??お酒を飲むと，顔が赤い｛ね／な｝。
　　b. ??毎日テレビゲームをすると，目が悪い｛ね／な｝。

したがって，確かに述語の意味制約が存在すると考えられるが，豊田（1983）ではその範囲を捉える上で十分な規定がなされているとは言い難い。

もう一つは，なぜ「現在の気持ち」を表す状態述語が非過去形で出現可能なのか，理由が述べられていない点である。この点に関しては，形容詞が話者の感情・感覚を即時的に表す「表出文」を形成するかどうかが重要な手掛かりとなると考えられる。「表出文」とは，山岡（2000:86）で「話者自身の主観を言語化する」文と定義されているもので，主体が一人称に限られ，テンス・アスペクトの分化がないといった特徴を有する文類型の一種である。「表出文」は語彙的意味に主観性を持っている形容詞と関係が深い。(8) の「楽しい」や「おいしい」は，話者の感情や感覚を表し，強い主観性を持っているため，表出文に適している。(9) の「速い」や「重い」のような形容詞も，物の属性を表すと同時に話者がそのように知覚したことを意味する。そのため，文脈によって主観的知覚の側面が強く意識されると，表出文を形成する可能性があり，そのような場合，形容詞終止形の使用が容認されやすい。(12) のように条件節の事態の成立時における話者の知覚を表す場合，形容詞終止形の使用が自然に感じられる。

(12) a.　［実際に自転車に乗って試してみた感想として］おおっ，この自転車はギヤを切り換えると，速い！
　　b.　［実際に写真を入れてみて重さを実感して］あっ，この手紙は写真を入れると，重い！

豊田（1983）は，終助詞の付加によって容認可能となると述べているが，これは終助詞が話者の主観性を表現するためで，表出文と同様の効果ではないだろうか。

また，豊田（1983）で「と」条件文の文末に生起できないとされている「～たい」「欲しい」は，(13) のように表出的ニュアンスを伴う場合には容認可能となる。

(13) ああ，やっぱり暑くなると，ビールが｛飲みたい／欲しい｝！

(12) や (13) のように「表出文」を形成する場合に，形容詞終止形が許されるという事実は，(3) のような交替現象が形容詞の主観性と関連を持つことを示していると考えられる。第３節で，この点をさらに検討し，(3) のような交替が起こる条件を考察する。

2.2. 定延（2002，2008）の指摘とその問題点

定延（2002，2008）は，(3) のような交替現象を，本来状態を表す形容詞終止形が「デキゴト化」する現象として捉えている点で，本稿に示唆を与える。ここでは，その主張と根拠となる現象を検討する。

定延（2002:159）によると，認知者が環境から情報を受け取ることを中核とする表現は，認知体験の表現であるという。この認知体験を定延は「デキゴト」[7]

と捉えている。たとえば，「痛い」という形容詞は，認知者が環境から体感として痛みの刺激を受け取ることを表すため，デキゴトの表現になるという。

状態がデキゴト化していることを示す現象の一つとして，定延（2002:173）では「ときどき」という頻度副詞との共起性が挙げられている。すなわち，「ときどき」という頻度の表現は，普通デキゴトと結びつくものであるが，（14a）の「ときどき痛い」は自然に感じられる。一方，（14b）の「赤い」は頻度表現と結びつきにくい。これは，「赤い」は客観的な状態を表すが，「痛い」は刺激を得る体験を表しているという違いによると説明されている。

（14）a.　このシートさっきからときどき痛いんだけど，なんか突き出てない？

b. ??このテレビさっきからときどき赤いんだけど，なんかこわれてない？

（定延 2002:173）

すなわち，体感の表現はデキゴト化するが，客観的な状態の表現はデキゴト化しないということになる。

定延（2002，2008）はまた，体感を表す形容詞は，条件文の帰結部分に終止形で用いられるのに対し，客観的な状態を表す形容詞は用いられないことを（15）と（16）の相違によって示している。

（15）［マッサージ機の「特強」のボタンを指して］

a.　これ押したら，気持ちよくなるよ～。

b.　これ押したら，気持ちいいよ～。

（16）［新型テレビの「ワイド」のボタンを指して］

a.　これ押したら，画面が横に長くなるよ～。

b. ??これ押したら，画面が横に長いよ～。

（定延 2002:174）

（15）は「この「特強」のボタンを押せば，マッサージの強さが特別に強くなり，大変気持ちがよくなる」と言おうとする場面で，（15a）の形容詞＋ナルも（15b）の形容詞終止形もどちらも自然である。一方（16）では，「この「ワイド」ボタンを押せば，画面が横に拡張され，画面が横に長くなる」ことを表す発言として（16a）は自然だが（16b）は不自然になる。これは，「画面が横に長い」は客観的な状態であるのに対し，「気持ちいい」は体内感覚であるという違いに起因すると定延（2008:156）で説明されている。つまり，体で感じることは人の体験であり，体験は特定の時間・空間に生じるデキゴトであるため，体感の表現は条件文の帰結部分に現れ得るという。

では，条件文の帰結部分に現れるか否かは，客観的な状態を表すか体感を表すかという語彙的意味の違いによるかと言えば，そうではない。定延（2008:157）は，あくまでも体感度，すなわち刺激の程度の強さが重要だと述べている。たとえば，色彩語は視覚的情報としての客観的状態を表す語であるように思われるが，条件文の帰結部分に現れ得ることが定延（2002:169，2008:158）で指摘されている。たとえば，（17a）の「真っ赤だ」は，「一分もしたら」という条件の帰結に現れるが，これは強い刺激であって体感として語られやすいからだという。

（17）［酸性に反応すると赤くなるリトマス試験紙を使って実験中に］

a.　さあ，溶液に試験紙を浸けた。一分もしたら，真っ赤だよ。

b. ?さあ，溶液に試験紙を浸けた。一分もしたら赤だよ。　（定延 2008:158）

（17b）の「赤だ」と比較すると，（17a）の「真っ赤だ」ほうが自然に感じられやすいのは，「真」という接頭辞によって甚だしい程度であることが示されているためだと説明されている。

定延（2002，2008）の指摘は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる際の意味的制約やその背後にある要因に言及している点で，本稿に重要な示唆を与えるものである。

しかし，当該の現象の成立を刺激の程度の反映として捉えている点は，疑問が残る。すなわち，（18）のような条件文もあり得ることから，程度が強い刺激でなければ，条件文の帰結部分に現れ得ないわけではないからである。

（18）［古代米について説明する文脈で］炊いたらほんのりピンク色。梅干を刻んだのを入れたみたいです。　（WEB 実例）

むしろ（17ab）の容認度の違いは，2.1節で述べた「表出文」としての適切性に深い関係があると考えられる。（17'a）と（17'b）では，両者の表出文としての適切性に差があることがわかる。

（17'）a.　うわぁ，試験紙を溶液に浸したら，真っ赤だ！

b. ?うわぁ，試験紙を溶液に浸したら，赤だ！

酸性に反応して赤くなるリトマス試験紙が単に「赤」であることは客観的な事実であり，表出文の特性である「話者の主観性」を持たない。それに対して，「真っ赤」であるという逸脱性の判断は話者によるものであり，表出文になりやすいという違いがあると考えられる。したがって，豊田（1983）の検討において述べたことと同様に，ここでも表出文を形成するか否かという観点が条件文における成立の可否を知る上で有効であると言える。

また，定延（2002，2008）の「状態のデキゴト化」という捉え方は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が

現れる現象の一部を捉えているものの，全てに当てはまるわけではないことを指摘しておきたい。たとえば，(19) のような条件文は，定延（2002，2008）では取り上げられていない。(19) では状態を表す形容詞終止形の使用がむしろ適しており，デキゴトの表現である形容詞＋ナルで置き換えられない。このような場合は，定延氏の議論では関心の範囲外である。

(19) a.　この枕，触ると，柔らかいよ。

　　b. *この枕，触ると，柔らかくなるよ。

(19a) で「柔らかい」は，前件の成立以前から「この枕」が備えている属性を表しており，前件の成立を契機に変化することを表しているわけではない。つまり，このような場合，形容詞終止形はデキゴト化しているのではなく，あくまでも静的な状態を表していると考えられる。

一方，これとよく似た例だが，(20) では形容詞終止形とともに形容詞＋ナルが用いられる。

(20) a.　この枕，寝ると，気持ちがいいよ。

　　b.　この枕，寝ると，気持ちがよくなるよ。

(20a) の「気持ちがいい」は，前件の成立によって起こる心理変化を表しており，形容詞＋ナルと置き換えられるため,「デキゴト化している」と捉えられる。つまり「状態のデキゴト化」という観点から見る限り，(19a) と (20a) はまったく異なるタイプの用法だということになる。しかし，(20a) は，「この枕で寝るのは気持ちがいい」という枕に関連する属性を述べているとも解釈できる。その意味では (20a) は (19a) と共通性を持っている。枕は前件の成立以前から変化していないのであるから，(20a) が属性として解釈される限りは，(19a) と同様，変化を表しているわけではないだろう。にもかかわらず，(20a) のみがデキゴト化しているという帰結は，事実の一側面を見落としていることにならないだろうか。むしろ (20a) で形容詞終止形がデキゴト化しない解釈があることを認めた上で，なぜ形容詞＋ナルとの交替が可能なるのかという問題に答える必要がある。そのためには，(19a) のような条件文を含めたより広い範囲の現象を検討する必要がある。

また，ここで重要なことは，形容詞＋ナルが表す変化が反復的な事態として解釈されることで，属性的な意味に近付くということである。たとえば，「この枕で寝ると，常に気持ちがよくなる」という反復的な変化は，「この枕で寝ること」がそのような変化を起こさせる可能性を備えているという認識を生み出し，その結果「この枕で寝ることは，気持ちがよくなるようなことだ」という属性の解釈が可能となる。以上のように属性の解釈が成り立つ場合，本来デキゴトを表す形容詞＋ナルが状態化すると言えるのではないだろうか。

以上のような考察から，本稿では，状態を表す形容詞が変化を表す動詞に近付く場合に加えて，変化を表す動詞が状態を表す形容詞に近付く可能性を検討したい。定延（2002，2008）の指摘は，前者の現象のみを説明するもので，後者の場合は考慮されていない。

以上が，先行研究の指摘から得られる示唆と残された課題である。次節では，ここでの検討から得られた観点に基づき，(3) のような交替現象が起こる要因を考察する。それとともに，定延（2002，2008）の批判的検討を通して得られた示唆に基づき，状態と変化の双方向の近接性について考察を深めたい。

3．条件文における状態と変化の近接性

ここでは２節の検討を踏まえて，条件文の帰結部分で状態と変化の表現が近接する現象がなぜ起こるのか，その要因を考察する。結論から言えば，上記の現象は状態表現である形容詞と変化を表す動詞が相互に接近することで成り立っていると考えられる。本節では，このような形容詞と動詞の近接性が，条件文の帰結部分で形容詞が形成する二つの文類型の性質を考察することで見えてくることを示したい。すなわち，条件文の帰結部分で形容詞が「表出文」と「属性叙述文」という二つの文を形成する可能性があり，その場合に形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能となる。その二つの文はどちらも，変化という動的事象を静的状態として捉えて表現するものである。条件文の帰結部分において形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能になる現象は，形容詞が表す事態が動的事象としても静的状態として捉えられる場合に可能となる。以上が本節で述べようとしている状態と変化の近接性の内容である。

本節は次のような順に議論を進める。まず，条件文の帰結部分に現れる形容詞の意味特徴と，それらの形容詞が形成する二つの文の特徴が交替現象に関わることを述べる。次に，形容詞の二つの意味が条件文の意味に反映され，条件文全体としての解釈にも二面性があることを述べる。最後に，交替に関わる二つの文の性質は話者の事態の捉え方を反映しており，その捉え方によって状態と変化が互いに近接し得ることを述べる。

3.1．条件文の帰結部分で形容詞が表す二つの意味

まず条件文の帰結部分に終止形で現れる形容詞の意味特徴を，豊田（1983）と定延（2002，2008）の検討を踏まえて再考する。２節で既に見たように，形容詞

は表出文を形成する場合に，条件文の帰結部分に現れ得る。交替が起こる（3）や（4'）の条件文に現れる形容詞は，話者の感情や感覚を表すもので，この種の形容詞は山岡（2000）で表出文を形成しやすいと指摘されている。（17）や（18）のように色彩語の場合も，逸脱状態を表す場合には，話者の主観的知覚として表出文を形成する可能性がある。

一方，（4）のように条件文の帰結部分に終止形で現れにくい形容詞は，客観性が強いため，表出文に適さないと考えられる。たとえば（21）のように「目が悪い」は，表出文を形成しにくい。

（21）［テレビゲームをした感想として］??ああ，毎日テレビゲームをすると，目が悪い！

このように表出文を形成するか否は，形容詞の主観性を測る一つの指標となり，それによって条件文の帰結部分に終止形で現れ得るか否かを予測することができると言える。本稿では，この条件文の帰結部分における形容詞終止形の表出的意味を《表出》と記すこととする。

豊田（1983）が言う「現在の気持ち」は，《表出》の持つ主観的性格と関係が深いと考えられる。また，表出文の性格は，「現在の気持ち」を表す状態述語がなぜ非過去形で出現可能かという理由を示しているとも考えられる。すなわち，条件節の事態の成立に際して，話し手がその場で感じたことを即時的に表現する表現が《表出》であり，《表出》は常に非過去形で表現される。条件文の帰結部分という文脈が加わると，《表出》は話し手の心理変化の瞬間として解釈され，その意味において形容詞＋ナルが表す変化の一局面と重なる。このようにして，条件文の帰結部分で形容詞終止形が形容詞＋ナルと交替可能になると考えられる。

ただし，形容詞が《表出》を表す場合でも，（22a）のような場合には，（22b）に示すように形容詞＋ナルと置き換えられない。これは，（22a）のような条件文が，条件節の事態を原因として状態変化が起こることを表しているのではないためである。

（22）a.　この枕は触ると，柔らかい。
　　b.　*この枕は触ると，柔らかくなる。

つまり，条件節の事態の成立が原因となって状態変化が起こることを表す条件文では，通常形容詞＋ナルが主節の述語となるが，話者が瞬間的変化点を捉えて《表出》を表す場合には形容詞終止形が用いられ，その二つの形式が交替可能となると言える。

以上で述べた《表出》を表す以外にも，条件文の帰結部分に形容詞終止形と形容詞＋ナルが共に現れる可能性があると考えられる。それは，（23）のように反復的事態を表す場合である。このような場合，形容詞終止形が現在の瞬間的な感情・感覚を表す表出文を成しているとは考えられない。

（23）マッサージをしてもらうと，いつも｛気持ちがいい／気持ちがよくなる｝。

（23）のような場合は，主節述語の形容詞は，話者の感情というよりむしろ（23'）のような属性の表現に近付いていると考えられる。

（23'）マッサージをしてもらうのは，気持ちがいい。

このような属性的解釈は，形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能となる条件文でしばしば認められる。（3）の条件文は全て，（24）のように条件節の事態を主題化して，その属性を表す文で言い換えられる。

（24）a.　家の中を綺麗にするのは，気持ちがいい。
　　b.　立ちっぱなしの作業が続くのは，辛い。
　　c.　自由な意見交換ができなくなるのは，寂しい。
　　d.　息子から頼られるのは，嬉しい。

また（3）の条件文は，（25）のように「それは」や「それこそ」などの指示詞を挿入し，条件節の事態を受けて主題化することができる。

（25）a.　家の中を綺麗にすると，それは気持ちがいい。
　　b.　立ちっぱなしの作業が続と，それこそ辛い。
　　c.　自由な意見交換ができなくなったら，それこそ寂しい。
　　d.　息子から頼られると，それは嬉しい。

一方，交替が成り立たない（4）のような条件文では，条件節の事態を主題化して，その事態の属性を表すことができない。

（26）a.　*お酒を飲むのは，顔が赤い。
　　b.　*温泉に入るのは，肌が綺麗だ。
　　c.　*テレビゲームをするのは，目が悪い。

（3）の条件文の帰結部分に現れる形容詞は，《表出》を表すことも，条件節の事態の属性を表すこともできるが，（27）や（28）のような場合には，《表出》だけが可能で，条件節の事態の属性を表すことはできない。

（27）*温泉に入るのは，肌がつるつるだ。
　　cf.　わあ，この温泉に入ると，肌がつるつるだ！

（28）*暑くなるのは，ビールが｛飲みたい／欲しい｝。
　　cf.　ああ，やっぱり暑くなると，ビールが｛飲みたい／欲しい｝なあ。

（3）の条件文で，条件節内の事態を主題として取り立てられるのは，条件節が表す事態が主節の状態変化の原因であると同時に，主節の述語が表す属性の帰属先でもあるからだと考えられる。そのどちらか一方では，この構文は成立しない。（26）（27）（28）のような場合は，条件節の事態が主節の状態を引き起こす原因になるが，主節の形容詞が表す属性の帰属先ではな

い。また，(19) のような場合は，物を主題としてその属性を表しているが，条件節の事態全体が属性の帰属先ではない。

本稿では，このように条件文の帰結部分において形容詞が条件節の事態の属性を述べることを《事態の属性叙述》[8] と呼ぶこととしたい。《事態の属性叙述》は，感情・感覚を表す形容詞と関係が深いが，それはこれらの形容詞が，原因となる事態と人の心理状態の依存関係を述べる性質を持つからだと考えられる[9]。すなわち，ある事態が恒常的に心理変化を引き起こす場合，その心理変化と事態の持つ属性が結び付けられ，事態を主題とする属性叙述文が形成される。

一方，感情・感覚を表す形容詞＋ナルが，条件節の事態の属性として解釈されることがある[10]。(24) の形容詞終止形を対応する形容詞＋ナルで置き換えて，(29) のように言い換えられることから，これらの文では形容詞＋ナルが，形容詞終止形が表す《事態の属性叙述》に近付いていると考えられる。

(29) a. 家の中を綺麗にするのは，気持ちがよくなる。
b. 立ちっぱなしの作業が続くのは，辛くなる。
c. 自由な意見交換ができなくなるのは，寂しくなる。
d. 息子から頼られるのは，嬉しくなる。

厳密にいえば，(29) のような場合も形容詞＋ナルは，反復的な変化を述べているのだが，変化の開始や終了という動的展開の意味は希薄化している。むしろ変化が起こる可能性という静的状態を表しており，それが主題の属性として解釈される。

以上をまとめると，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れるのは，主節の形容詞が《表出》を表す場合か，《事態の属性叙述》を表す場合であると考えられる。そして，前者の場合は，形容詞終止形が形容詞＋ナルの意味に近付くことで，後者の場合は，形容詞＋ナルが形容詞終止形の意味に近づくことで，それぞれ両形式が置き換え可能となると言える。

(3) のような例では，形容詞が《表出》と《事態の属性叙述》のどちらを表しているのか，一方に特定することは難しい。感情・感覚を表す形容詞は話者の主観を表すと同時に，その心理状態を引き起こす原因となる事態の属性を表す側面を持つため，《表出》か《事態の属性叙述》かの違いが見分けにくいからである。

3.2. 条件文の二つの解釈と感情・感覚形容詞の特性

ここでは典型的に交替が起こる場合に，条件文全体の解釈が二面性を持つことを論じる。

本稿が扱う条件文は，形容詞終止形と形容詞＋ナルの非過去形が主節の述語となるものであるが，そのような条件文は (30) の前田 (2009) による条件文の用法分類のうち，主に「一般条件文」「反復条件文」か「発現」「発見」の用法に当たると考えられる[11]。

(30) 条件文の用法の分類

- 仮定的
  - 反事実的用法
  - 仮説的用法
- 非仮定的
  - 多回的
    - 一般条件文
    - 反復・習慣条件文
  - 一回的
    - 連続
    - きっかけ
    - 発現
    - 発見

(前田 2009:40)

「一般条件文」「反復条件文」は，前件の成立を契機に後件の事態が恒常的・反復的に起こることを表す条件文で，「発現」「発見」は，前件が表す状況で後件の状態が見出される意味を表す条件文である。

典型的に交替が起こる場合，この「一般／反復」の解釈と，「発見」の解釈が同時に成り立つことが多い。たとえば，「家の中を綺麗にすると，気持ちがいい」という条件文は，次のような二つの解釈が可能である。一つは，前件の事態の成立によって，話者が新たな感覚を得ることを表しているという解釈で，豊田 (1979:92) の定義では「発見」の用法に含まれる[12]。もう一つは，前件の事態「家の中を綺麗にすること」が恒常的・反復的に人を気持ちよくさせるという「一般／反復」の解釈である。この場合，単に反復的な事態を表しているという解釈に留まらず，条件節の事態が気持ちよくさせるような属性を持っているという《事態の属性叙述》につながる。この二つの解釈が同時に成立するのは，主節の述語が感情・感覚を表す形容詞の場合で，形容詞の解釈が二つあることを反映して，条件文全体の解釈も上記の二つが結びついていると考えられる。

通常，「発見／発現」の条件文は，前件の事態の成立をきっかけに，新たな状態を見出す一回性の事態を意味する。しかし，(3) のように交替が起こる場合，「一般／反復」という多回性の事態の解釈も同時に成り立つのはなぜだろうか。それは，感情・感覚を捉える話者の認識と関係があると考えられる。通常，条件文の事態の成立を待たなければ，後件の感覚が生じることはない。しかし，人はしばしば「私がやってそうだから，誰がやってもそうだ」という認識によって，自らの心理経験を一般化して述べることがある。そのような場合，話者は前件の事態が成立する以前から，その事態が潜在的に持っている可能性を述べている。その

可能性は，事態が持つ属性として解釈される。そのようにして，一回性の感情・感覚が一般的・反復的事態として語られ，それが条件節の事態の属性として恒常的な性質を持つことになる。

以上のように，感情・感覚を表す形容詞を主節の述語とする条件文は，主節述語の解釈の二面性を反映して，「一般／反復」と「発見／発現」の両方の意味を持つ。

3.3. 話者の事態の捉え方と状態と変化の近接性

本稿は，本来状態を表す形容詞がなぜ変化を表すように見える場合があるのかという疑問を出発点に，条件文の帰結部分における状態と変化の交替を考察してきた。最後にここまでの議論を受けて，冒頭の問題への答えを探る。

一つは，定延（2002，2008）で指摘されていたように，形容詞の意味が形容詞＋ナルが表す変化の意味に近付くためだという答えである。定延（2002，2008）は状態がデキゴト化した結果，本来はデキゴトが表されるべき条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れ得ると捉えた。その「デキゴト化」は，《表出》を表すという形容詞の一般的性質によって捉え直せる。すなわち，定延氏が「一瞬であり，時間の進展がないデキゴト（定延 2002:179)」と述べていることは，まさに《表出》が「今ここ」という瞬間的現在に限定される感情・感覚の表現であることと重なる。人が何らかの感情・感覚を経験することは時間に限定されるデキゴトであるが，その一瞬を捉えれば，動的展開はない。そのため，動的展開を表さない形容詞が用いられる。形容詞が《表出》を表し，さらに条件文の帰結部分という文脈が加わると，条件節を契機にして起こる変化事象の一瞬の変化点として解釈される。形容詞＋ナルが表すような幅を持った変化ではないが，変化事象の一局面と重なりを持つことで，形容詞＋ナルの意味に近付くと言える。

またもう一つの答えは，形容詞と形容詞＋ナルがともに属性という状態を表しているためだというものである。特に，感情・感覚を表す述語では，形容詞と対応する形容詞＋ナルがどちらも《事態の属性叙述》を表す機能を持ち，その意味において二つが接近する可能性がある。これは客観的な属性を表す形容詞にはない，感情・感覚を表す述語の特性であると考えられる。ある原因によって人が何らかの心理変化を経験するというデキゴトは，恒常的・反復的な事態として捉えられると，原因と心理が固定的な関係として結ばれ，属性化する。感情・感覚は原因に依存的に変化すると捉えられるために，原因に結び付けて捉えられやすいと考えられる。そのような事態の捉え方によって，動詞が本来持つ，開始・終了といった動的展開が意識されなくなり，結果として一様な事態である状態に近付くと考えられる。

以上の考察から，変化をどう捉えるかという話者の事態の捉え方を背景として，状態と変化が双方向に接近することが示された。すなわち，(3) のような交替現象は，《表出》と《事態の属性叙述》という二つの表現によって形容詞と変化動詞が互いに近付くことを要因として成り立っていると結論付けられる。

4．まとめと結論

本稿は，条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能になる現象について考察し，その成立要因を説明した。本稿の主張は，次のようにまとめられる。すなわち，条件文で状態を表す形容詞と変化を表す形容詞＋ナルが意味的に近付く現象は，次の二つの意味変化を要因とする。

【1】状態が変化に近付く

主節の形容詞が話者の感情や感覚を即時的に述べる《表出》を表す場合，形容詞が瞬間的な変化点を表していると解釈されるため，形容詞＋ナルが表す変化の意味に近付く。そのため，前件の事態を契機に後件の状態変化が起こることを表す条件文で，形容詞終止形が形容詞＋ナルとともに現れる。

【2】変化が状態に近付く

主節の形容詞が，条件節の事態が潜在的に持つ属性を述べる《事態の属性叙述》を表し，且つ，対応する形容詞＋ナルが表す反復的な変化がその意味に近付く場合に，両者が交替可能となる。なお交替が起こる条件文は，次の二つの解釈を同時に受ける。すなわち，前件の成立をきっかけに，話し手が新たな感情や感覚を得るという発見の意味と，前件の事態の成立を契機に，後件の状態変化が反復的に起こるという意味である。以上の主張は図１にまとめられる。

本稿は，先行研究では捉えきれなかった成立条件を正しく導くことができたとともに，《表出》と《事態の属性叙述》という二つの意味において状態表現と変化表現が接近することを明らかにしたと言える。

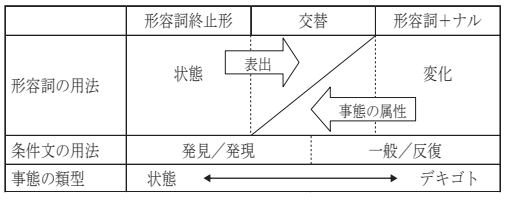

図１：状態と変化の近接性と交替現象

本稿の知見はまた，人の感情・感覚という心理を表す述語の特性を知る上で重要であると言える。本稿で観察されたことは，心理述語においては形容詞と動詞がアスペクトの有無によって完全に対立していないことを示すものであるとも言える。心理を表す動詞においてスルとシテイルが完全なアスペクト対立を成さないことが指摘されている（工藤 1995:70）が，それと根本は同じ問題であるように思われる。すなわち，本稿は，心理述語のアスペクト的特異性を示す新たなデータを加えた点で意義が認められると言える。本稿で扱った現象以外にも，「悲しい」と「悲しんでいる」のような心理を表す形容詞と動詞テイル形のアスペクトは近接性を持つと考えられる。今後はこのような現象を含めて，心理述語における形容詞と動詞がなぜ意味的に近接するのか，考察を続けていきたい。

【注】

1）本稿は非過去形に限って議論を進める。それは，本稿が新たな状態の生起を表す場合の交替可能性を問題としているためである。過去形の場合は，「変化の結果の状態」を表すという別の要因で，形容詞終止形と形容詞＋ナルが近接すると考えられる。たとえば（ｉ）では，非過去形は現れないが，過去形は現れる可能性がある。特に，過去の出来事を想起しながら述べるという「叙想的テンス（寺村1984:107）」の解釈が成り立つ場合に許容されやすい。

（ｉ）お酒を飲むと，顔が｛*赤い／赤かった｝。

cf.　お酒を飲むと，顔が赤くなった。

ここで，「顔が赤かった」と「顔が赤くなった」が交替可能であるとしても，それらは変化を表しているのではなく，変化の結果の状態を表していると考えられる。この場合の形容詞終止形と形容詞＋ナルの意味の違いは，寺村（1984:136）が論じているように，眼前の状態を変化の結果として解釈するか否かによる違いである。

本稿は，非過去形による未実現の変化の表現を扱うことで，ここで述べたこととは異なる要因で両形式が近接する可能性を探る。

2）WEB 実例と表示した例文は，インターネットから採取したデータである（用例出典参照）。その他，特に断りがない例文は，筆者の作例である。文法性の判断は基本的に筆者が行い，補助的に数名の日本語母語話者の判断を参考にした。文法性判断を示す記号として，非文法的な文は「*」，非文法的とまでは言えないもののかなり不自然さを伴う文は「??」，不自然さを伴う文は「?」と記した。

3）ただし，「嬉しくなくなる」というような心理状態の消失が属性の意味になる例は見受けられない。これは，心理状態の生起は，原因となる事態の特徴付けになるが，消失は特徴付けになりにくいためだと考えられる。

4）当該の交替現象は，「と」条件文に多く見られるが，「たら」条件文でも観察されるため，本稿では両形式を含めて検討している。

5）前件が状態性述語の場合には主節の述語に意味の制限はないと豊田（1983）は述べている。しかし，その場合形容詞＋ナルが生起しにくいことから，本稿が扱おうとする変化の意味を表す条件文には相当しないと考えられる。（ⅱ）と（ⅲ）は意味の違いはほとんどないと考えられるが，形容詞＋ナルの容認度が異なる。このことから，前件が状態性述語か否かが形容詞＋ナルの可否に影響を与えていると考えられる。

（ⅱ）　メロンは冷たいと，｛おいしい／*おいしくなる｝。　（豊田1983:11，原文終止形）

（ⅲ）メロンは冷やすと，｛おいしい／おいしくなる｝。

そこで本稿ではまず交替が起こる可能性が高い前件が動作性述語の場合を考察対象とした。前件が状態性述語の場合は今後の課題として検討したい。

6）たとえば，「*仕事が終わると，早く家に帰りなさい」と言えないように，「と」条件文では文末に意志のモダリティが現れない。「たら」条件文では，「仕事が終わったら，早く家に帰りなさい」と言えることから，このような制限がない（日本語記述文法研究会 2008:102）。

7）カタカナで「デキゴト」と表記する場合，開始・終了などの動的展開の有無に関わらず，時間軸上に位置する事象を指すものとする。この表記は，定延（2002，2008）に倣うものだが，形容詞に時間軸上に位置する事象を表すものがあることは，眞野・影山（2009）でも指摘されている。

8）「属性叙述」の定義は，益岡（1987，他）の叙述類型論における定義に従い，「特定の時空間に実現存在する事象ではなく，対象の属性を述べる」ものとする。感情・感覚を表す形容詞が，原因を主題化してその属性を表す属性叙述文を形成する機能を持つことは，山岡（2000:135-141）でも指摘されている。山岡氏はそのような形容詞を「属性的情意形容詞」と呼び，「情意表出」と「属性叙述」の二つの文機能を持つとしている。

9）ただし，「～たい」「欲しい」は，（28）に示したように事態の属性を表すことができない。これは，「～たい」「欲しい」が常に対象補語をとる性質に起

因すると考えられる。なお，これらの述語が物の属性を表す可能性はあることに注意されたい。たとえば評論家などが「この映画は，ぜひ見たい」と言う場面では，映画の属性として解釈される可能性がある。

10）類似の現象として，「慣れない仕事は戸惑う」などの心理動詞のル形による属性叙述文がある。本来事象を表す心理動詞が，どのような条件の下で属性叙述文を形成するかという成立条件については，小竹・酒井（2009）で詳しく論じた。

11）形容詞＋ナルが表す変化が仮説的な一回性の事態の場合，仮説的用法に含まれる可能性もある。しかし，条件文が表す事態が個別的なものか，一般的なものかを区別することは非常に困難である（前田2009:48）ため，「一般／反復」に含めて考えることとした。

12）豊田（1979:98）では，話者が物の存在や状態を発見する場合だけでなく，「花子が部屋へ行くと，いいにおいがした」のように話者が「自覚する」場合を「発見」の用法に加えている。通常の「発見」では，前件の成立以前から存在している状態が発見されるのだが，感情・感覚の場合，前件が成立してはじめて生じる点で通常の「発見」とは異なる。

【参考文献】

影山太郎（2009）「序　事象の把握と言語表現」影山太郎（編）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』，pp.3-12，大修館書店.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

小竹直子・酒井弘（2009）「心理動詞による属性叙述文の成立条件－英語中間構文との比較を通して－」『日本語文法学会 第10回大会発表予稿集』，pp.112-119，日本語文法学会.

定延利之（2002）「「インタラクションの文法」に向けて－現代日本語の疑似エビデンシャル－」『京都大学言語学研究』第21号，pp.147-185，京都大学大学院文学研究科言語学研究室.

定延利之（2008）『煩悩の文法』ちくま新書.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

豊田豊子（1979）「発見の「と」」『日本語教育』36号. pp.91-105，日本語教育学会.

豊田豊子（1983）「接続助詞「と」の用法と機能（Ⅴ）－因果を表す「と」－」『日本語学校論集』10号，pp.1-24，東京外国語大学外国語学部付属日本語学校.

日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法６　第11部　複文』くろしお出版.

前田直子（2009）『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究－』くろしお出版.

益岡隆志（1987）『命題の文法－日本語文法序説－』くろしお出版.

眞野美穂・影山太郎（2009）「第２章　状態と属性」影山太郎（編）『日英対照　形容詞と副詞の意味と構文』，pp.43-75，大修館書店.

山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版.

【用例出典】

（3a）http://www.lscservice.jp/, 2010/4/23

（3b）http://www.interq.or.jp/ski/hasegasj/x-strec.htm, 2010/9/3

（3c）http://news.livedoor.com/article/tb/3960419/, 2010/9/3

（3d）http://blog.goo.ne.jp/mo-e-e/d/20080915, 2010/9/3

（18）http://rikuzo.exblog.jp/2052852/, 2010/4/30